

令和 7 年 7 月 25 日

令和 6 年度 特別の教育課程の実施状況等について

栃木県		
学 校 名	管理機関名	設置者の別
足利市立桜小学校	足利市教育委員会	公立

1. 特別の教育課程の内容

(1) 特別の教育課程の概要

本市全小学校において、平成 15 年度より取り組んできた英会話学習の内容と外国語活動・外国語科の内容を関連づけた独自の年間指導計画を作成し、「話すこと」「聞くこと」に特化した指導を行うことで、英語によるコミュニケーション能力の育成を図る。

必要となる教育課程の基準の特例については、「教育課程特例校編成の基本方針等について」を参照。

2. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

- 計画通り実施できている
- ・一部、計画通り実施できていない
- ・ほとんど計画通り実施できていない

(2) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

- 実施している
- ・実施していない

(3) 自校における評価

- ・第 1 学年からの英会話学習の実施が、英語によるコミュニケーションの基礎的な能力の育成につながっているか。

前学年からの積み重ねが感じられる。繰り返し聞き、話したことで、あいさつや月・曜日・天気の違いなどに定着が感じられる。コミュニケーションをとる上で大切な英語を聞く耳が育ってきていると思う。聞く力は話す・読む・書く力の基礎となるものなので低学年のうちから英会話を実施することは、英語に馴染み基礎的な能力を育成することにつながっていると思われる。

- ・第1学年からの英会話学習の実施は、英語に慣れ親しむことにつながっているか。

ネイティブの先生の英語にふれたり関わったりすることや、授業の始めに行うあいさつの積み重ねで基本的な英語での対応に慣れ親しんでいる。身の回りの簡単な言葉をたくさん英語で伝えることで、英会話に対する抵抗感が減り、楽しみながら学習に取り組んでいる。ゲームや歌、いろいろなジェスチャーを取り入れた授業は、1年生が英会話の学習を楽しみ、慣れ親しむことにつながっている。

- ・第1学年からの英会話学習の実施によって、外国語や外国の文化に対する興味・関心が高まっているか。

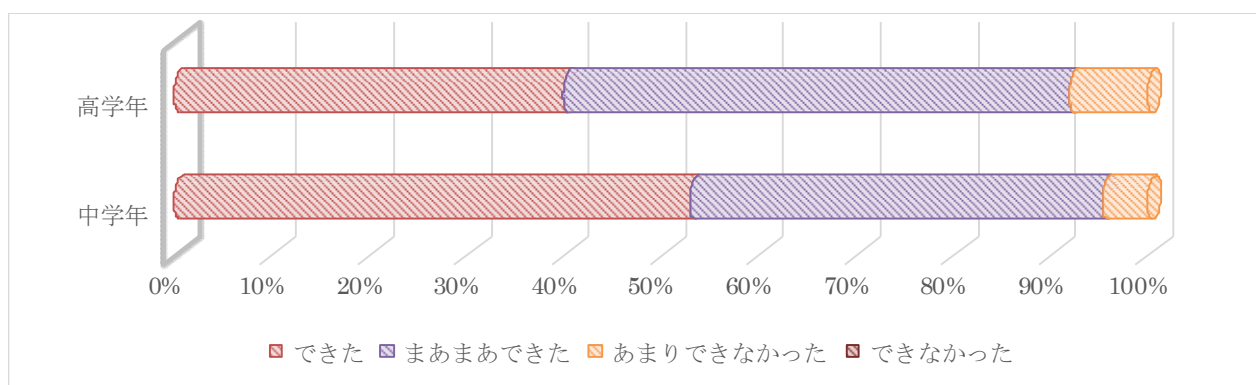
ハロウィンやクリスマス、お正月や夏休みの過ごし方などの外国の文化について知る機会につながっていると思う。初めて知る文化や慣習に驚いたり、興味深く思うような反応をしたりしている児童も多い。毎年行うことで、自然に外国の文化を受け入れ、日本文化との違いに分け隔たりを感じることもなく、当たり前のこととして浸透しているように感じられ、外国の文化を尊重する気持ちが育っていると思われる。

- ・その他、第1学年からの英会話学習の実施に期待すること等。

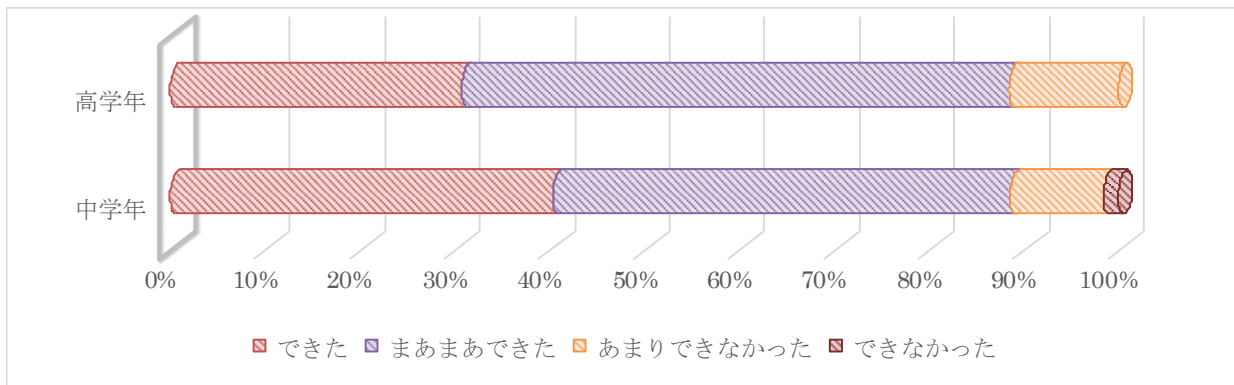
外国語への苦手意識をもたせないことを前提として取り組んでいる。英語に対する抵抗感をなくし、アクティビティなどを通して楽しく活動しながら言葉（単語）や短い会話を繰り返し練習し、英語での会話が自然にできることを期待している。低学年からの外国語を学ぶ楽しさを感じられる指導を経て、中・高学年の外国語活動・外国語科の学習へとつなげられるようにしていけるとよい。中学年以降の学習へのモチベーションを高めるとともに、外国人への思いやりの心が育ち、国際理解につながることも期待している。

（４）学校関係者による評価

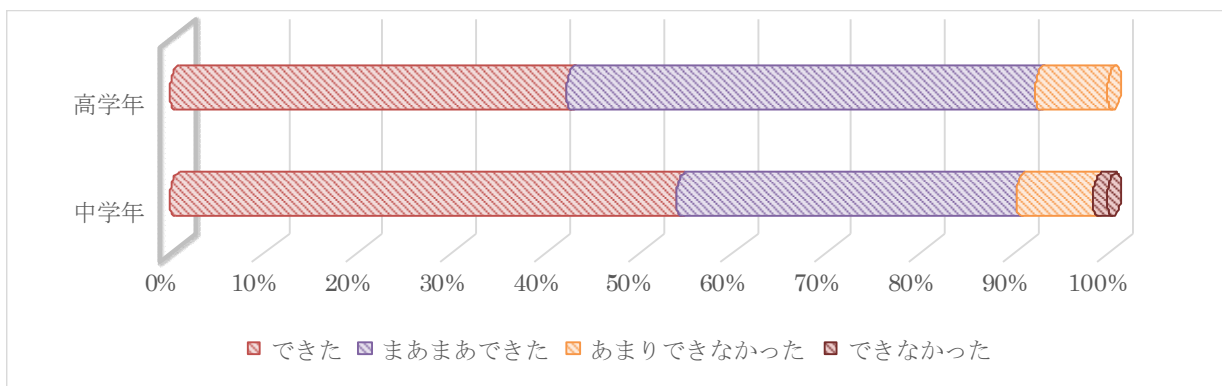
- ・ALTやEAAとの学習についての意識。（英会話学習について、ALTやEAAとの学習を楽しみと評価している児童。）



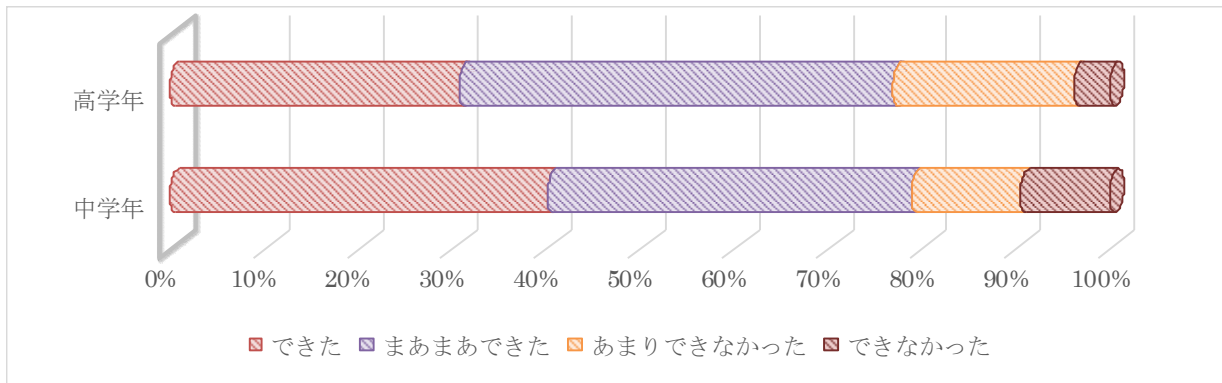
- ・ALTやEAAとの活動内容についての意識。（英会話学習について、その時間で学んだことをALTやEAA相手に活用できたと評価している児童。）



- ・ 英語によるコミュニケーション能力の自己評価。(英会話学習について、学んだことを生かして、友達と簡単な会話ができたと評価している児童。)



- ・ 英会話学習について将来の有用性への意識。(英会話学習について、学んだことを学校の外で活用できた (活用できる)。)



- ・ 自由記述には、どの学年でも英語が話せるようになった嬉しさや、英語で会話したり買い物ゲームなどのアクティビティを通して英語を使ったりすることの楽しさに関する記述が多い。EAA やALT の人柄や教え方が分かりやすいと答えた児童も複数いた。
高学年ではタブレットを活用した英語でのスライド作成が楽しかったと挙げる児童が多数いた。また、これまでの学習の積み重ねを意識し、少しずつ英会話が身についてきていると実感している児童もいる。

3. 実施の効果及び課題

児童による評価、問1・問2では共に85%を超える割合の児童が、英会話学習の授業に楽しく取り組み、EAAやALT相手に学んだ単語や会話を使っているという結果が得られた。この結果から、英語に対する興味・関心は3年生以上の学年で高く、EAAやALTとの授業に前向きな姿勢で授業に取り組んでいるといえる。これは例年同じような傾向が見られる。

問3のコミュニケーション能力の自己評価では約90%の児童ができていると答えており、授業中に積極的に英語で会話しようという姿勢が伺えた。問4の将来の有用性への意識では、できる（できた）と感じている児童は中・高学年とも75%ほどで、割合としては、他の質問の結果に比べやや低い結果になったが、一昨年よりも高い結果となっている。実際に学校外で英語を使う機会がそれほど多くはないということが、この結果に起因していると考えられる。日常生活において、これから英語に触れる、英語で話す機会は益々増えると思われる。日常、そして将来の様々な場面を想起させ英語の有用性を感じさせたい。

また、単元ごとのゴールを明確にし、授業で学んだことのスライド作成などによる発表など、英語を学ぶことの楽しさを見いだせるような授業づくりをこれからも意識していく必要がある。

4. 課題の改善のための取組の方向性

取り組みの方向性として、今年度①～③の三点を継続して取り組んでいく。

①ゴールを意識した授業作り

単元ごとのゴールを明確に提示し、身につけさせたい力を意識して指導に当たる。グローバルな視野をもたせ、なぜ英語を学ぶのか目的をもって学ばせることで、有用性への実感につながっていくのではないかと考える。

他学年との交流、英語チャレンジDAYなどで、必然性のある目的・場面・状況を意図的に設定し活用することが、児童の達成感や自信につながると考える。

②Teacher's Talk の活用

授業の内容に関連付け、授業の導入時にはEAAやALTと担任・専科教員とのTeacher's Talkを実践し、英会話のモデルを示すことで、児童の興味・関心が高まると考える。

また、教師と児童、児童同士のsmall talkの会話の場面を意図的に取り入れ、会話を繰り返すことで、表現の定着につながると考える。

③他教科や行事等と関連付けた授業の実践

児童の実態や興味・関心を把握し、他教科や行事（遠足・修学旅行）等と関連付けた授業を実践していくことで、英語にふれる時間を増やし、英語の必要性を実感させ、コミュニケーションの手段の一つとして活用していく力を養っていけると考える。